

考えること

3年3組20番戸谷小雪

<はじめに>

私が異文化理解について関心をもったきっかけは、私が中学3年生の時です。中学3年生の時、父親の会社の取り引き相手が中国にいたので、一緒に実際の取り引き現場に付いていける機会がありました。滞在期間は1週間程でしたが、当時中学3年生で初海外だった私は慣れておらず、異国と日本の違いを様々なところで感じていました。例えば、中国の方はここまでなくていいのになと気を遣ってしまうくらいおもてなしをしてくれたり、食べる物、清潔感、価値観など全てが違いました。最初は戸惑い体調を壊したこともありましたが、徐々に慣れていく中でこれが異文化であり外国なんだと感ずるようになってきました。また、日本と少し離れているだけにこんなに文化やマナーが違うんだと、世界は広いんだと初めて考えることができました。そこから異文化理解、異文化コミュニケーションに関心を持つようになりました。

<序論>

中国から帰国後、ニュースを見ていると異文化理解、多様性という単語をよく耳にするようになりました。実際、中国にいた時は異文化を感じただけであって具体的にどういうものなのかは知らないなと感じました。どういうものなんだろう、調べてみたいなどと興味を持っている時に、新設校として、奈良県立国際高校が設立されると聞きました。説明会などに行き、グローバルで様々なことを学べる国際高校に身を置いていれば、私も色々な考え方が身につくのではないかと感じたので入学しました。国際高校に入学して1年経った頃に、学校設定科目「グローバル探究」の授業の中でゼミ選択がありました。LGBT,HSPなど多様性を持つという取り組みが強まっている中で、私は異文化理解や多様性を示す言葉を簡単に口にしているのかと感じていました。そのようなことを高校一年生の時に思ったので、2年生になったら多様性や異文化理解が学べる「グローバルが生み出す力」を選びました。そして自分達を含め、世界の人々が直面する異文化理解について知りたいと考えました。

そして、ゼミ選択後グローバルのゼミで異文化理解について調べていきました。異文化理解を調べるには、範囲が広すぎる為、外国人労働者が直面する異文化理解、個人間の異文化理解と各自色々な異文化理解について多方面から調べることにしました。異文化理解が私たち日本人の間に浸透するにはどうしたらいいのだろうかと考察していくことにしました。外国人労働者について調べるために「関西技術協力センター」にインタビューしました。その企業は外国人技能実習生を企業へ送り出すまでの日本語教育や日本での生活マナー、習慣を教育している企業です

<本論>

日本と世界で異なる生活習慣、考え方、マナー、宗教、など様々なバックグラウンドが原因で外国人の方とトラブルが起っています。例を挙げると、日本では、「はい」と「いいえ」を遠回しに言うため、外国人は判断に困るそうです。それに対して外国人の方ははっきり意見を発言するので空気を読めないと日本人を不快にさせます。(出典:関西技術協力センターホームページ)

これらの点から双方に誤解があるということが分かります。これらの問題だけでなく言語や異文化の違いから生じるトラブルの解決法を探るために、以下の疑問点を外国人実習生を日本に積極的に受け入れている「関西技術協力センター」に4月22日に以下の質問をインタビューしました。

- 1.外国人実習生について
- 2.外国人実習生をサポートして気づいた点
- 3.普段から外国人と関わることで変化した考え方

4.外国人実習生を受け入れる利点

日本に来る外国人実習生は18歳から25歳の若い世代が多いです。主な理由としては日本語を学び自国で仕事に生かすため、自分自身の成長のためです。しかし約20年前までは多くのお金を親に援助しようという思いで日本に来る実習生が多かったそうです。

日常的に外国人と関わる事できちんと相手に「理解」できるように伝えることの大切さに気づいたそうです。ベトナムからの実習生は教えたことが分からなくても分かるという人が多くいたそうです。その為、相手に教えたことをもう一度行ってもらい理解できているかを確認します。

日本人の多くは体力仕事に就くことを望んでいないため中小企業では人手不足に悩まされているのが現状です。しかし、実際に外国からの実習生を雇用することで社内の雰囲気にも変化がありました。具体的にあいさつをはっきりするように教育されるので実習生の明るく大きな声、仕事に対する積極的な姿勢です。このように実習生を受け入れることによって会社の中が活性化され、明るい企業になることが期待されます。ですが、実習生として来た外国人は滞在期間が3~5年、特定技能制度で最長10年、企業の仕事に慣れてきた頃に帰国する必要があります。これが実習生と企業にとって互いに残念な点です。

このインタビューを通して外国人と関わる事で新しい気づきを得られるだけでなく企業の成長にもつながることを学びました。

異文化理解というと、外国人との文化の違いに例がたくさん思い浮かびます。しかし、私達は外国人との文化の違いだけでなく、普段の生活でも他者との違いには、触れているのではないのでしょうか。その考えをどのように解消していくことができるか考えました。青木(2001)によると、私達の脳は他者をカテゴリー化して区別しています。毎日初めて会話をする人から一瞬だけすれ違う人まで、どう対処すれば良いか素早く判断し、分類しているのです。

その分類が色んなネットワークを結んでいき、ステレオタイプを産みます。青木(2001)によるとステレオタイプとは、ある地域の人が共通の特徴を持っている、という画一的な意見や信念、つまり認知成分を指しています。

さらにそこに否定的評価、感情を伴うと偏見に繋がります。実際の私たちの生活でも意識していなくても勝手に判断してしまうことは多々あると思います。なので、私達は常に他者を偏見で判断してしまい、正確に判断していないという危険に晒されています。

では、なぜステレオタイプや偏見が生じてしまうのでしょうか。青木(2001)によると、それは、外界を単純化し、秩序立てて把握できるように、脳自体がそう働いてしまうからです。また、そのプログラムは人間が生まれたホモ・サピエンスの時代から変わっていません。つまり、脳のプログラムの的には自分の命を守るために内集団と外集団を区別しているのです。さらに、カテゴリー化を極端にすることで、自分の属する集団の連帯感が強化され差別偏見に繋がっていきます。

ステレオタイプや偏見があることで、相手に嫌な思いをさせたり、場合によっては今まで築き上げた人間関係が壊されたりしてしまうこともあります。それなのにどうしてステレオタイプは維持してしまうのでしょうか。理由として3つ挙げられると考えます。青木 保 (2001)によると、

1.リバウンド効果

抑制しなければいけない対象に敏感になり、余計脳の動きを活性化させてしまう。つまり、辞めようとすればするほど意識してしまう。

2. ある信念を持つと、それと一致する事象が生じると予期してしまう。

3.文化的違いによって非言語的なメッセージに対して違う意味解釈をしてしまう。非言語メッセージとは、表情、身振り、体臭、身体的接触、距離感、服装、時間の使い方などが挙げられます。つまり、脳の仕組みは、今の時代に着いてきてないのです。

では、偏見を持たれる側の心理はどうなるのでしょうか。スティグマ、つまり偏見をもたらず属性は、このように分類することができます。

- 1.人種、民族、宗教などの集団
 - 2.身体的障害などの肉体に関すること
 - 3.犯罪者や精神疾患の人などの性格上の欠点
- これらのスティグマには特徴があります。

- 1.制御可能と思われるスティグマは制御不可能とされる場合より他者から否定される
- 2.本人の社会的地位や、業績に関わらない
- 3.偏見の目で見られるかもしれないという脅威

特に3番の場合には、そう扱われている人自身が本人の本質のせいだと思ってしまう、ステレオタイプや偏見のせいなのか、本人の本質のせいなのか分からないという問題があります。

そう思ってしまう理由として、

- 1.社会的自己評価。つまり、自分自身の価値の社会価値の低さ
 - 2.自分が何をしても変わらないという無力感
 - 3.今の人間関係を否定的なものとしたくない、否定的な人に囲まれていることを認めたくない
- これらの理由から、ステレオタイプや偏見ではなく本質のせいだと考えてしまい、今よりも自分自身のことを責めてしまいます。

では、私達がステレオタイプから抜け出すにはどうしたらいいのでしょうか。

ステレオタイプから逃れようとするために知識を得ようと思って相手に接触することは、自分自身にも心理的負担がかかります。

むしろ信念が強化され、前よりも思い込みが悪化してしまう場合もあると思います。個人化した接触ではカテゴリーへの偏見を持ち続けてしまいそうです。そこで、私達は再カテゴリー化を目指すことが良いのではと考えています。具体的には、

- 1.別のカテゴリー化をする。その人が属している様々なカテゴリーを探す
- 2.同一化をする。相手と似ているところを探す

例として、相手を嫌いな人というグループに入れるのではなく、気にしない人というグループに入れることや、相手と共通の趣味を探してみることが挙げられます。これらを意識することで、色々なネットワークを繋げられ、リバウンド効果も起きず、心理的負担もかからず、解決の糸口を見つけることができるのではないのでしょうか。また、教育の時点でこのような考えを緩和させていけるのではないかと考えます。

<結論>

私たちは他者を無意識に脳で判断しています。そこに否定的評価、感情を伴うと偏見に繋がり、その偏見が生じる背景には判断をする側とされる側双方に問題があることがわかりました。私が今回ファミリーの2人と一緒に異文化理解について調べてみて思ったことは、正解はないということです。

異文化理解や偏見を受け入れるための方法を調べてみてもインターネットの記事にはなかなか書いてくれません。

そんな中で私なりの偏見への改善方法を見つけました。それは、偏見や固定観念を持たず、自分で考えることをやめないことです。例えば、子供の頃から学校で何かを教わっても、教師が話すことや教科書に書いてあることを何も疑わずに受け入れてしまう人は多いと思います。また、SNSで流れている情報が本当に正しいのかわからないのに何も疑わず信じてしまう人もいます。その結果、自分で考えるのをやめ、覚えることが学びになってしまいます。そのようなことが続いってしまうと、自分の意志がなくなり自己主張ができなくなります。結果、自分の考えではなく周りに

合わせてしまうことになります。つまり、あの人はこうだからこういう人だよねと、その偏見を受け入れていいのか、自分で考えもせずに受け入れてしまうことに繋がってしまうのです。また、ある文化の中で生まれ育った人は、その文化が世界中の人間の常識となっている考えに囚われてしまうことが多いです。その人はその常識が本当に正しいのかというようなことは考えもしないのです。

このような点から、私はどう思うのか、私はどうしたいのか、常に自分に問いかけながら生きていけば偏見や異文化に直面しても動揺しないと思います。また、異文化に直面した際、すぐに相手と自分の間に境界線を引くのではなく、自分の知識と経験をアップデートさせることができると前向きに考えることができれば、偏見はなくなると思います。

出典

・集英社オンライン. 自分の人生を生きるためには、親が勧めるのとは違う人生があることをまず知らなければならない.

<https://news.yahoo.co.jp/articles/dcea293106aaa18408da5714838b3851b5347d29?page=1>,
参照(2020-9-21)

・青木 保 (2001/7/19)「異文化理解」岩波新書

・池田 理知子(編著)／埴 幸枝(編著)／青沼 智(著)／宮崎 新(著)／神戸 直樹(著)／石黒 武人(著)／鳥越 千絵(著)／師岡 淳也(著)／河合 優子(著)

(2019/04/10)「グローバル社会における異文化コミュニケーション」三修社